

1. 市の沿革



玉野市は、岡山県の南端に位置し、瀬戸内海の美しい自然に恵まれた、風光明媚で気候の温暖なところである。

その沿岸一帯には屈曲した入江が多く、太古より舟航の便に恵まれ、天然の良港として栄え、また、19世紀から入江を利用した塩の生産地としても知られるようになった。

行政においては、明治22年に町村制が実施された際に、それまで田井、宇野、玉、和田、日比、渋川の6つに分散していた村が、田井、玉野、日比の3か村に統合され、さらに明治39年4月には、玉野村が宇野と玉に分割、

宇野と田井村が合併して宇野村、玉と日比村が合併して日比町となった。

明治39年には宇野港が修築され、明治43年の宇野線開通と宇高連絡船の就航により、本市は本土と四国を結ぶ海上交通の要衝として繁栄の基礎が築かれた。その後、大正8年宇野港の発展とともに宇野村が町制を敷き宇野町となり、さらに昭和15年8月3日、宇野・日比両町が合併し、県内4番目の都市として玉野市が誕生した。

また、昭和28年に町村合併促進法が施行され、地方自治行政の規模適正化のため、生活圏、経済圏を同じくする児島郡山田村を同年7月1日に、同荘内村を昭和29年4月1日に、同八浜町を昭和30年2月1日に、さらには昭和49年3月20日に同東児町を編入合併し現在に至っている。

産業においては、明治末年、杉山製銅所（現パンパシフィック・カッパー（株）日比製煉所）が、大正6年には川村造船所（現三井造船（株）玉野事業所）が建設されて以来、製造業を中心に発展してきた。しかし、近年の産業構造のソフト化に伴い、主要産業は第2次産業から第3次産業へ移行してきている。

また、昭和63年の瀬戸大橋開通に伴う宇高連絡船の廃止によって交通体系が劇的に変化し、本市の繁栄の基礎となった港湾機能も、その再編を余儀無くされた。さらに、平成10年の明石海峡大橋、平成11年5月の瀬戸内しまなみ海道の開通により、「瀬戸内三橋時代」を迎え、より広域的な経済文化交流圏の形成を促すとともに、一方では新たな都市間競争をもたらした。

そこで、これらの状況に対応するため、宇野港港湾計画を基に、宇野港宇野地区を人流ゾーン、同田井地区を物流関連ゾーンとして再編整備することとなった。

また、近年、市民のまちづくりに対する参画意識が高まっていることから、地域が主体性を持ち、その能力を十分発揮できるよう市民活動の積極的な支援を行い、市民と行政との協働によるまちづくりを進めるとともに、本市を取り巻く環境の変化に適切に対応し、限りある財源の中で事業の選択と集中を行いながら、「安心・活力・支えあい～みんなで築く自立都市」を将来像として掲げ、地域の特色を生かした満足度の高いまちづくりを進めている。